

須坂市口明塚第4・5・6号墳
確認試掘調査報告書

1975年9月

須坂市教育委員会



1. 口明宿第1号塙全景



3. 口明宿第4号塙トレンチ



2. 口明宿第5号塙全景



4. 口明宿第6号塙トレンチ

須坂市口明塚第4・5・6号墳 確認試堀調査報告書

金井正三

目 次

1.はじめに	2
2.古墳をとりまく自然環境	4
3.調査日誌	4
4.試掘調査の結果	7
第4号墳	7
第5号墳	7
第6号墳	8
5.まとめ	9

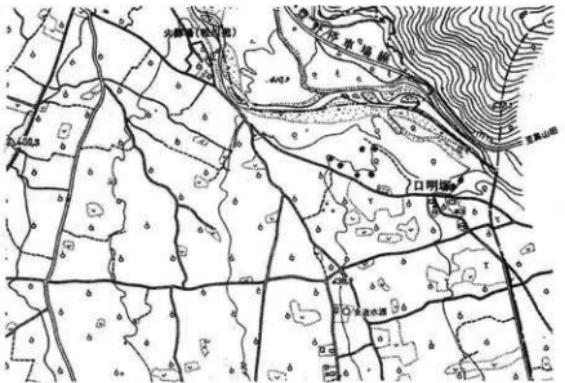
1.はじめに

口明塚古墳はいわゆる積石塚である。須坂市の北端、松川の流域にあって、一つの古墳群を形成していることで知られている。

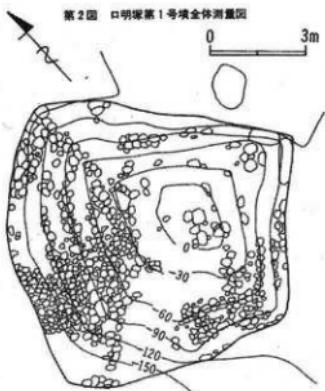
言うまでもなく、積石塚古墳は石を積んで墳丘をなす独特の古墳であり、千曲川下流の埴科・上高井・下高井地方、いわゆる河東地域に濃密な分布を示している。須坂市はこの分布の中心域にあるわけで、古墳といえばほとんど積石塚でしめられている。しかしながら、このような特異な築造と分布をもつ積石塚がどのような性格をもつものなのか、今の所、定説はない。一つには古文献にあらわれてくる信濃の埋葬人と対比し、積石塚が朝鮮半島の墓制に通ずるとする「帰化人説」があり、一方においては、石の豊富な環境のもとに発達したとする「自生説」がある。もともと、自生説においても、積石塚を多くにいたる源流となったものは、半島の積石塚築造の意図にもとめられるとしており、帰化人が介在していたであろうという点では共通する。当初は帰化人の意志が大いにあざかっていたといわれるが、それでも今日、両説とも決めかねているのは、積石塚古墳の出土遺物にうかがわれるべきそれらの要素が極めて乏しいことにあ。

昭和42・3年にわかった長野古墳群(長野市若柳)や大室古墳群(長野市松代)の大がかりな発掘調査によってさえも、その性格を把握することは困難であったのである。須坂市でも昭和28年に鎌塚第1・2号墳が発掘調査されたことがあった。そして、第1号墳が積石塚の中では最も古い時期に相当するものとして注目されたが、帰化人の関連を証明するものはなかった。ただ、新しい時期に相当する第2号墳からは、金綱製帶具が見見され、この文様が高句麗のものと類似している点で大きな反響をよんだのであった。

こうしたことから、須坂市教育委員会では重点的に積石塚の調査と保存に力を入れてきた。本年3月には口明塚第1号墳と、これより南約2kmの地点に一群をなす境坂第1号墳がとりあげられ、現状測量と写真記録が行なわれた。口明塚第1号墳についていえば、南北9m、東西9m・高さ1.6mのほぼ方形を呈し、古墳は8基のうち最も保存状態が良好であった。しかし、埴丘の形状は積石塚の性質上、極めて変形しやすいので、原形の姿をそのまま残しているとは考えられず、築造時は円墳であったか方墳であったかを決定することは困難であった。石室の構造については、現状からは判断できなかったが、椭円石室で、かつてここからは直刀や土管などが掘りだされたといわれている。なお、口明塚第5号墳も比較的保存状態がよいが、他の6基については、びどく窓されて破壊しているため、掘ってみなければわからない状態であった。



第1図 口明塚古墳群付近の地図（1万分の1）



- 3 -

ところが、この口明塚第1号墳の測量調査が終った後の6月16日になって、頃坂建設事務所より、一般報道奥山田・豊野線改良工事に先立ち、頃坂市日曜口明塚跡内に所在する口明塚第4号墳から第6号墳の3基について、試掘を伴なう確認調査の依頼ができた。

そこで、市教育委員会は市文化財審議委員・関孝一氏に現地視察を依頼し、古墳として確認されている第1号墳は一定に保存することを前提に、協議した結果、調査を受けることにした。受諾した理由は、①第4

・6号墳は著しく荒されており、古墳かどうか確認する必要がある。②比較的良好な状態にある第5号墳は、調査によってその内容を明らかにし、合わせて保存の基礎資料にする、ということであつた。

かくして7月17日、頃坂市教育委員会と頃坂建設事務所との間で発掘委託契約がとりかわされ、調査の準備がすすめられた。しかし、この授業にいたって、用地買取が済んでいないということがわかり、計画に障壁をきたすことがあった。地主には前記理由を説明し、快よく了解を得たわけである。

2. 古墳をとりまく自然環境

頃坂市は千曲川の河東域にあり、姑川、市川の南部扇状地と松川・八木沢川の北部扇状地からなる。その複合部に市街地の発達がみられるが、各扇状地の山間部は田舎村と高山村にあたる。

口明塚古墳は北部扇状地の高山村との境界に近い、松川の河岸段丘上に立地している。古墳はくねぎなどの雜木林の中にあるが、ここから南へは日高原とよばれる広大な果樹園地帯になる。しかし、肩部のため水便が悪く、果樹園としての農業開発が進む以前は、極めて劣悪な条件下にあつたという。それに加えて、松川の押出しによる河原石は、今まで堆のいたる所にヤックラとなつてつまれている。

こうしたヤックラにまじって、口明塚第1号墳のように川のすぐ近くとか、境隈古墳のように頃央部に立地していること自体、不思議である。

頃坂、上高井郡地方、いわゆる須高地方における古墳の分布をみると、駄田流域と小布施町雁田山麓に特に密集している。この南、北端の密集中の間に、口明塚、境隈、坂田などの古墳群が立在している状態である。ちなみに、口明塚の立地する松川の対岸は雁田山がせまる所になり、積石塚の密集中地である。一つ離れて対岸の古墳群とどのような結びつきがあつたのだろう。また、口明塚・境隈の周辺には、この墳の土師遺跡は発見されていない。あるいは、はるか離れた肩部の土師墓と関連性があったのだろうか。いずれにしても、口明塚は一般的な分布のあり方とや異なる立地をしているのである。

3. 調査日誌

1995年

8月4日(月) 天候 晴

昨日までのうだるような暑さも、やや和らいではいるが、それでも現場は焼けつくような暑さである。

作業は埴丘及び周囲に生えている雜木の伐採からはじめた。チェーンソーと鎌を使い雜木を次々と切り倒していく。第4号墳はスムーズに伐採できたが、第5号・6号墳の雜木には藤蔓等が巻きついてなかなか思うようにはかどらない。しかし困難を克服して夕刻までには太い木の伐採を終了した。



- 5 -

図5 第4号墳の測量結果

8月5日（火）天候 晴

午前9時現地集合。第4号墳から清掃作業を行なう。昨日切り倒した雑木は3基の古墳をおおい覆すようにかぶっている。これを整理するにはかなりの時間と労力がかかりそうである。

8月6日（水）曇のち雨

朝、晴れ間の見えた空も徐々に雲が増えてきた。昨日に引き続き清掃作業をはじめた。これに併行して清掃の済んだ第4号墳から現状測量をはじめたが、午後になって急に雲が厚くなってきた。2時には雨が落ちてきたので測量は中止したが清掃作業は続行。しかし無情の雨は全く晴れる気配はなく、むしろ激しくなってきた。ようやく第6号墳までの清掃が終了したので3時半に作業を打ち切る。

8月7日（木）雨のち晴

昨日からの雨は依然として降り続け、梅雨に戻ったような感じである。午前中は中止とした。11時頃になって晴れ間が見えたので午後から作業を開始した。第4号墳の測量を行なう。土屋社会教育課長も視察かたがた、調査に加わった。

8月8日（金）曇

第4号墳は南北に細長いので、東西トレンチを2本入れてそれぞれ掘り下げる。しかし大小の河原石が乱縦に積み上げてあり、意識的に積まれた様子はまったくなかった。これと併行して第5号墳の測量を行なう。

結局第4号墳は何も出土しなかったため、清掃して、写真撮影と実測をとり終了する。

続いて第5号墳の発掘に取りかかる。ここも南北に長いため東西トレンチを1本設定した。かなり大きな石が多く期待されたが、石室と思われるところはなかつた。

8月9日（土）天候 晴

昨日に引き続いて第5号墳の掘り下げを行なう。東西トレンチたちで空きさせて南北トレンチを設定する。しかし依然として遺物の1つも出土しない。約1.5m掘り下げて終了する。これに併行して第6号墳の測量を行なう。

続いて第6号墳の発掘に取りかかる。

8月10日（日）天候 晴

昨日に引き続いて第6号墳を掘り下がたが、小さな砂利ばかりで、大きな石が全くない。結局70cm下げて終了する。

結いて第5号墳、第6号墳の清掃を行ない、写真撮影、実測を行なう。

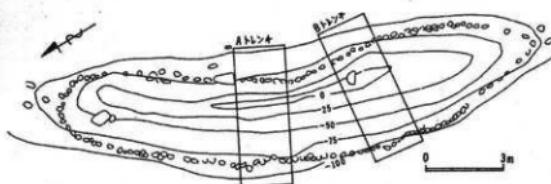
結局今個調査した3基ともに古墳ではなく、ヤッカラであった。

8月11日（月）天候 晴

埋め戻し作業を行ない、今回の発掘作業の全行程を終了する。

4. 試掘調査の結果

1. 第4号墳



第4図 口明塚第4号墳全体測量図



第5図 口明塚第4号墳Aトレント北壁セクション測量図

南北19m、東西は広いところで4mの細長い孤状をなす。表面には大きな石が散りちらるだけではなく、ほとんどが拳よりやや大きめの石で構築されている。石室が発見されるとすればおそらく中央部付近、両端はないと思われるが、墳丘を寸断するように長さ5.5m、巾2mの東西Tレンチを2本設けて、それぞれA・Bトレントとした。

Aトレントでは拳大の石ばかりで大きな石はほとんどない。その積み方もかなり乱雑で意識的に積んだ様子はまったくなかった。結局深いくどころで60cm掘り下げて終了する。

BトレントはAトレントよりもやや大きめの石が多いが、同様にきわめて乱雑な積み方であった。これもAトレント同様、地山まで約60cm程掘り下げて中止とした。

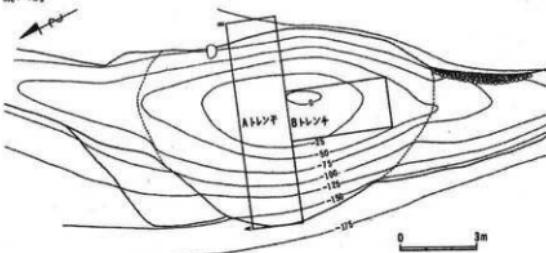
結果第4号墳は既述中などに簡略された折、邪魔な石を積み上げたいわゆるヤックラと断定した。

2. 第5号墳

今回調査した3基の中では最も良好な状態をもち、大きく期待された。平面形は横円形を呈し、南北12m、東西7m、高さ1.7mである。墳丘にはかなり大きな石が露呈している。

トレントは、東西8m、巾2mとし、これをAトレントとした。トレント内の石は直径30cmぐらいのものが多く、第4号墳の石とは比較にならないほど大きな石ばかりである。50cm程掘り下げて

は平らにして検討してみたが、石室と思われるような所は見当らない。そのためAトレントと直交させて長さ4m、巾2mのBトレントを設定し、Aトレント同様に掘り下げたが同じような状態が続いた。



第6図 口明塚第5号墳全体測量図

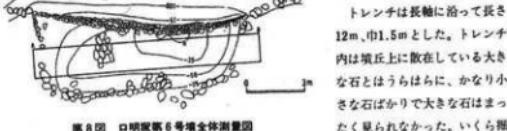


第7図 口明塚第5号墳 Aトレント北壁セクション測量図

結局上から下まで大きな石を乱雑に積み上げてあるのみであったため、1.2m掘り下げて終了した。これも第4号墳と同じくヤックラである。

3. 第6号墳

平面形は細長い台形をなし、長さ11m、巾4.5m、高さ0.8mである。墳丘上には比較的大きな石が散在している。墳丘の北東側は石垣状になっているが、他の3方はゆるやかである。



第8図 口明塚第6号墳全体測量図

っても同じような状態であるため約50cm掘り下げて終了する。

これもヤックラであった。



第9図 口明塚第6号墳 トレンチ東壁セクション実測図

5.まとめ

今回調査した口明塚第4・5・6号墳の3基は結果的には古墳ではなく、単なるヤックラ（石積み）であった。しかしこれもあって口明塚古墳群のすべてがヤックラであり、古墳ではないと判断すべきではない。それは積石塚古墳のもつむきわめて変化しやすい性格を考慮に入れる必要があるからである。すなわち古墳は住居址のように土に埋もれているのではなく、地上に築造されているために非常に人目につきやすい。その上、積石塚古墳は石だけで構成されていて、地中に石が投げ込まれて堆疊が大きくなったり、またここ数年間の建築ラッシュによって採石場者に堆疊がそっくり持ち去られ形もなくなりたり、はたまた廃石ブームによって古墳の一番重要な部分である石室を構成する石が抜き取られたりしている。

このように現在存在する積石塚古墳で堆疊及び石室が荒らされていないのはほんんどないと言っても過言ではないであろう。そして、第5号墳のようにかなり大きめの石を積み、立派な堆疊を呈するものでさえも、開発等によってあらたに塚状に變かれたものも多いと思われる。

積石塚古墳は上述したようにきわめて可変性の強い遺構であるために、外形から古墳であるかヤックラであるかを見分けることはきわめて困難であるといわねばならない。今回調査した3基はすべて古墳ではなかったが、このように荒れた堆疊を呈するものであっても、破壊される前には必ず調査する必要があろう。

掲筆するにあたり、種々御指導いただいた各位に心から感謝の意を表す次第である。

参考文献

1. 信濃考古学叢観 上・下巻 (昭和31年)
2. 長野県考古学会誌——積石塚をめぐる諸問題—— (昭和44年)
3. 信濃・長原古墳群・大塚初重砦 (昭和43年)
4. 大室古墳群北谷支群緊急発掘調査報告書・朱山一政他 (昭和45年)
5. 考古学雑誌——45巻1号——長野県須坂市鎌塚古墳の調査—— 永峰光一・龜井正道 (昭和35年)

調査会・調査団氏名

【調査会】

- 会長　宮崎 裕司（須坂市教育長）
理事　徳永 哲夫（須坂市公民館長）
同　徳永 隆壽（須坂市博物館長）
同　土屋 政博（須坂市教育委員会社会教育課長）

【調査団】

- 調査主任　間 孝一（須坂市文化財審議委員）
調査員　小林 重義（東京都教育庁文化課職員）
同　金井 正三（須坂市博物館学芸員）
調査補助員　須坂園芸高校社会科クラブ員

【事務局】

- 小林 哲男（社会教育課長補佐）
小林 詔夫（社会教育課文化財係主事）
村石ちい子（須坂市博物館主事）

昭和50年9月12日 印刷
昭和50年9月30日 発行

「須坂市口明塚第4・5・6号境
確認試験調査報告書」

発行 須坂市教育委員会
印刷 芳文堂印刷